

家族イメージ法(FIT)を用いた質的研究法の開発

臨床心理学コース 中 坪 太久郎
臨床心理学コース 新 谷 侑 希
臨床心理学コース 坂 口 健 太
臨床心理学コース 塩 見 亜沙香
臨床心理学コース 亀 口 憲 治

Development of a Qualitative Research Method
Using Family Image Technique(FIT)

Takuro NAKATSUBO, Yuki ARAYA, Kenta SAKAGUCHI, Asaka SHIOMI, Kenji KAMEGUCHI

This article suggests a method to use FIT(Family Image Technique)in qualitative studies. This method could find “the rich data” easier, and is a new approach that has characteristics of quantitative and qualitative methods.

目 次

- I はじめに
- II 質的研究法にFITを用いる
 - A データ収集の難しさ
 - 1 質的研究を実施するうえでの困難
 - 2 家族に関する語りを得ることの難しさ
 - B FITについて
 - 1 FITとその特徴
 - 2 FIT研究の現状
 - C 質的研究にFITを用いる試み
- III FITを用いた質的研究の例
 - A FITを用いた質的研究法開発への試み
 - B FIT実施時における心理的プロセス
 - 1 問題と目的
 - 2 方法
 - 3 結果
 - 4 考察
 - C 具体的事例から質的研究法開発へ
- IV 質的研究にFITを用いることの利点と課題
 - A 質的研究にFITを用いることの利点
 - 1 面接者との視覚的対象の共有
 - 2 促進される語り
 - 3 KJ法とFITの親和性
 - 4 臨床実践と研究活動をつなぐ
 - B 質的研究にFITを用いることの課題

- 1 FITを用いた質的研究の例について
- 2 方法の併用
- V おわりに

I はじめに

行動科学としてのアイデンティティを確立してきた心理学は、近年になり、その主要な基盤となっていた量的研究法に対して疑問を呈しつつある(能智, 2005)。量的な研究では仮説演繹法がとられることが多く、実験によって仮説が検証されることに適した心理現象が、心理学の研究テーマの中心となってきた。Heshusius(1986)は、実践場面においては、「目的、希望、意思」などの主観的な側面がしばしば重要になるにも関わらず、操作的定義や、実験的探求の困難さゆえに、これまであまり心理学研究ではテーマとされてこなかったことを指摘している。また、心理学の研究法について、下山(2002)は、心は客観的に観察することのできる対象ではないという基本理念と、厳密に客観的な手法であろうとする方法論との間で、自己矛盾をきたし、さまざまな限界が指摘されるに至ったと述べている。

質的研究法は、実験法のような量的研究での限界を超えるために、近年、特に多くの期待を集めている方法論であるとされている(村本, 2006)。とりわけ、ほとんど知られていない研究領域や特別な問題、状況、環境において、質的研究は有効であるが、それは、表

面に現われているものごとだけでなく、見えないところで進むプロセスを明らかにすることができるためである(Holloway & Wheeler, 2000)。また、すでに知られている領域や考え方に新鮮で新しい展望をもたらすことができるとされている(Strauss & Corbin, 1990)。

このような質的研究法であるが、フィールドワークや、解釈的研究、ケーススタディ・アプローチといった、いくつかのタイプが存在する。また、データ収集に関しても、面接・参加観察・記録物からのデータ収集などの方法がある。その中でも、臨床心理学研究において、データを集める方法として最も一般的な形は面接である。そこで本論文においては、質的研究のための面接によるデータ収集に焦点を当て、データ収集に有用なツールの提案を行うこととする。

Ⅱ章では、質的研究法におけるデータ収集の困難と、その補助ツールとしての役割が期待されるFIT(家族イメージ法)について説明する。Ⅲ章においては、実際にFITを用いて行った質的研究の例を紹介する。さらにⅣ章では、質的研究にFITを用いることの利点および限界について、また、質的研究と量的研究の懸け橋としてのFITの可能性についても言及したい。

Ⅱ 質的研究法にFITを用いる

A データ収集の難しさ

1 質的研究を実施するうえでの困難

量的、質的に関わらず、データは、実証的研究においての基礎になるものである。質的研究では、現象を的確にとらえることが必要である(戈木, 2005)とされており、そのためには、詳細なデータを集めることが求められる。また、そのデータに関しても、質的研究のために収集するデータのタイプは自然のままであるべきである(Willig, 2001)とされている。質的研究におけるデータの収集について、May(1991)は、情報を引き出そうというはっきりとした目的のために前もって計画を立てると面接は形式的になり得るが、実際には参加者との偶然の出会いと形式ばらない会話から、その研究にとっての重要な考えが生み出されると述べている。このような理由からも推測されるように、質的研究における面接でのデータ収集では、構成的でない面接法が頻繁に用いられている(Swanson & Chenitz, 1992)。

しかし、特に研究の初心者にとって構成的でない面接の中から内容的に豊かなデータを集めることは困難を伴う。面接の場では、自然体で気楽に語り合える雰

囲気が醸成されることがもっとも大事である(呉, 2005)、調査に入る前に、言葉かけの上での配慮が必要である(呉, 2005)、といった提言は、質的研究におけるデータ収集の留意点であるとともに、データ収集の難しさを表しているとも考えられる。実際に、戈木(2005)は、現象は動的で刻々と変化する生き物のようなものであるため、データとして捉えるにはそれなりの技術が必要である、と述べている。

このような技術を補うために、Holloway & Wheeler(2000)は、初心者は自分の友人や知り合いを相手に面接し、このようなタイプのデータ収集に慣れておくことを勧めているが、簡単に習得できるものではない。また、Swanson et al(1992)は、面接に不慣れな場合の方法として、面接ガイドや面接項目の概要をまとめたものを使うことを勧めている。このような方法は、初心者にも研究の中で捉えたい現象を捉えやすくする。しかし、ガイドに厳格に則ることは、データの広がりが必要以上に狭めてしまう可能性もあり、また、新たな発見の妨げになることも考えられる。このような問題を克服するためには、面接者が捉えたい現象に関する一定の枠を持ちながらも、自然で豊かな語りが得られるような工夫が必要になるであろう。

2 家族に関する語りを得ることの難しさ

質的データの代表例である「語り」を得る場面の中でも、ここでは特に、家族を対象とした質的研究の難しさに言及したい。

第一点は、対象者の年齢による難しさである。子どもの観点から家族を捉えた研究をする際、言語的な記述のみに限定したデータを得るのはきわめて難しい。大西(2003)は、児童期を「心身機能の未分化や自我発達の未熟さなど」がある時期、思春期を「他人に内界に踏み込まれることを極端に嫌がり、自分の内面を大人に知られたくない気持ち」が働く時期とまとめている。このような時期においては、内的表象が言語のみによってあらわされない。そのため思春期以前の対象者については、「非言語的媒体の活用」(佐治, 1995)が内的表象の理解のために不可欠となる。

第二点は、家族がひとつのシステムとして働くことから起因する難しさである。家族観の多様化が進んで久しい現代にあっても、伝統的家族観からの束縛、家族に関する神話(たとえば柏木, 2003)の作用などによって、家族に関することに特有の語られにくさが存在する。家族に関する語りを得られないことの顕著な例としては、虐待が疑われる家族の面接をあげることがで

きる。このような場合、虐待している可能性のある家族成員の前で、被虐待が疑われる家族成員に話を聞くことは禁忌とされている。これには、更なる虐待を引き起こすことを避けることに加え、家族にとっては都合の悪い「虐待」という事実を隠そうとする心理が働くことを防ぐ意味がある。また子どもが、親、特に母親の「無謬性」(芹沢, 2004)を信じ込んでいることが多いために、家族に関する真実が語られないこともある。

B FITについて

前述のようなデータ収集の難しさを克服するために、家族に関する語りを得やすくするツールとして、FITを取り上げる。

FITについて紹介した後、FIT研究の動向について概観し、FITを用いて家族に関する語りを得る試みについて述べる。さらに、FITの特徴が、家族を対象とした質的研究のために有効に働く可能性について考察する。

1 FIT とその特徴

FITは、家族イメージのアセスメントを目的として開発されたテスト法である(新藤・相模・田中, 2002)。秋丸・亀口(1988)がKvebackのFamily Sculpture Technique(1980)を独自にアレンジした心理アセスメント法であり、その後も幾度か改訂が重ねられてきた。最新のものは亀口(2003)である。

FITは、見開きB4版の用紙を用いて行われる。用紙の左側にはFIT作成にあたっての教示が、右側には升目つきの正方形(縦15cm, 横15cm)の枠が用意されている。この枠内に、個々の家族成員を表す直径1.6cmの円形シールを配置する。このシールは白から黒の5段階に色分けがなされており、これは各家族成員のパワー・イメージを表す。また、このシールには鼻のような矢印がついている。作成者は、この矢印が家族成員の関心の向きを表すようにシールを配置する。シールを配置し終えたら、各シールがどの家族成員にあたるかを書き入れる。そして各家族成員の2者間を、関係性を表すために、直線シールで結んでいく。関係性は、「強い結びつきがある」「結びつきがある」「よくわからない」の3種類から選ばれる。

分析にあたっては、前述したパワー・向き・結びつきという指標の他、夫婦の位置関係、子シールと夫婦軸(夫シールと妻シールを結んだ線)との関係、占有率(家族イメージ全体が用紙上に占める割合)などの指標を用いる(森岡・小菅・張・中川・亀口, 2006)。指標

が多数あるため、検査者がFITを使い慣れていない場合のための「個人別チェックリスト」と「組み合わせチェックリスト」が用意されている。

開発者らは、FITを「シンプルな形の投映法」としている(柴崎・丹野・亀口, 2001)。投映法が他の検査法と異なる点としては、①与えられる刺激の非構造化・曖昧性、②求められる反応の自由度が高いこと、③人の内部状態を表すパーソナリティ要因を推測する手続きであること、の3点が挙げられるのが一般的である(中島, 1997)。この3点に従って、FITの特徴を述べていく。

FITにおいて与えられる刺激は、家族成員をあらわす円形シール、結びつきをあらわす直線シール、そして正方形の枠である。呈示された刺激を用いて作成者が作業をする点、およびそれぞれの刺激の使用方法が定められている点において、FITは投映法としては特異である。ただし、円形シールの濃淡や直線シールの太さ、枠内に家族イメージが占める割合などに対する意味づけが作成者に委ねられている点においては、刺激の曖昧性、および反応の自由度という投映法の特徴が確保されている。また、枠内に表現されるのは、各家族成員が家族に対して抱いている視覚的イメージである(亀口, 2000)。家族をひとつのシステムと考えれば、映し出された家族イメージとは、ある視点から捉えられたそのシステムのパーソナリティといえることができる。特に家族全員でFITを作成し、それらを総合的に解釈する場合には、そのパーソナリティがクリアになるだろう。

2 FIT研究の現状

FITが臨床的に用いられるのは、主に家族カウンセリングの場においてである。家族同席の場で実施され、その結果が相互に確認される時、FITはその効果を最大限に発揮する。特に家族カウンセリングの初期段階において、家族メンバーそれぞれがFITを作成することによって、家族カウンセリングを通じて達成すべき目的についてのアカウンタビリティの確保(亀口, 2000)、家族メンバー同士のコミュニケーションの促進、カウンセリングに対するモチベーションの上昇などの効果が期待される。面接開始前と終結時の両方でFITを実施することによって、家族機能の変化を見ることが出来る。その場合、カウンセラーのみならず、家族メンバー自身が家族関係の変化を把握することも可能である(柴崎ら, 2001)。

このように、臨床事例の把握においてFITは有効な

アセスメント法となるが、この方法の最大の利点は、数量的な分析がしやすい点にある。このため、家族イメージに関する集団の傾向を量的に探るためにFITを用いた研究が、いくつか積み重ねられてきた。これまで扱われてきた集団には、小学生(新藤ら, 2002), 中学生(大下・亀口, 1999), 大学生(相模, 1997; 片平, 2005), 韓国人留学生(田中・白, 2003), ウィグル族の中学生(大下・亀口, 1998), オランダの知的障害者(河東田, 2005)などがある。

FITを量的に分析することは、家族病理のスクリーニングという観点から大きな意味を持つ。ある集団における平均的な家族イメージ図を数量的に示すことができれば、そこから大きく逸脱するようなケースをチェックすることで、家族病理の早期発見に繋がる可能性が考えられる(柴崎ら, 2001)。

集団に対する調査の結果同士を比較するためには、分析指標の統一、および信頼性と妥当性についての検討が必要である。柴崎ら(2001)は、FITの回答過程についてのプロトコル分析と再検査法によって、FITの数量化のしやすさと信頼性を確認した。ただし、サンプル数の不十分さや対象が限られていることが指摘されている(森岡ら, 2006)。また、前出・島谷(2004)は、併存的妥当性を検討するための研究を行っている。

C 質的研究にFITを用いる試み

前節で紹介したように、FITから得られたデータを量的に分析する研究はいくつか積み重ねられてきている。一方、FITから得られた質的なデータを分析する試みは、ほとんどなされていない。しかし、FITが持つ特徴は、豊富な質的データを提供する可能性を示唆している。

FITが臨床面接で用いられる際には、家族間のコミュニケーションを促進する効果があることが示唆されている(柴崎ら, 2001)。これはFITが、家族の語りの基盤の役目を果たしているからと考えられる。この仮定に立てば、家族面接でない実施場面においても、作成されたFITが作成者の語りを生成する基盤となる可能性が考えられる。臨床心理学の初学者が、面接対象者から家族に関する語りを得ることに困難があることは、想像に難くない。しかし、FITという媒体をもとに面接が展開されるならば、家族という軸をもった語りをより容易に得ることができると予測される。

また、FITが投映法であることに注目したい。質的アプローチの特徴として、①自然なコンテキストの中での観察や面接を重視すること、②研究対象者の主観

的な体験や行為に対する意味づけに焦点を当てること、③雑多なデータから機能的に仮説や理論を立ち上げることがあげられる(能智, 2000)。FITが映し出すものが、各家族成員の抱く家族イメージであること、FITにおいて与えられる刺激に対する反応の自由度が確保されていることから、質的アプローチの特徴のうち、対象者の主観に焦点が当てられている点、および雑多なデータを得ることが可能である点において、FITは質的アプローチのツールとしての要素を十分に備えていると言えよう。

以上のように、質的研究における面接でのデータ収集において、FITの持つ特徴が有効に機能する可能性が考えられる。そこで、次章では、このような観点から実際にFITを用いて行った質的研究について紹介する。

III FITを用いた質的研究の例

A FITを用いた質的研究法開発への試み

II章において概観した質的研究法の困難、およびFITの特徴と現状を踏まえ、FITを用いた質的研究法の開発へとつながる試みの一つとして、筆者らは「FIT実施時における心理的プロセス(中坪・新谷・坂口・塩見, 2006)」という研究を行った。この研究はあくまで質的研究にFITを用いた一つの例に過ぎない。しかし、FITを用いた質的研究法の開発という大きなテーマへの出発点としては、この研究のような個々の具体例から得られる知見を一つ一つ積み上げていくという丁寧な作業を欠かすことはできない。実際に、この研究から得られた数々の知見、特に臨床的示唆からの考察においてみえてきたいくつかの特徴は、FITを用いた質的研究法の開発にとって非常に示唆深いものであると言える。以上の理由から、FITを用いた質的研究の例として以下に紹介する。

B FIT実施時における心理的プロセス

1 問題と目的

FITを扱った先行研究には、アセスメント方法としての妥当性・信頼性を検討するもの、各指標に対する意味づけを探るものがあるが、FIT作成者の思考過程を丁寧に分析する研究は未だ行われていない。臨床場面において、面接者としてFITを用いる際には、実施時にFIT作成者の内面で起こるであろう心理的プロセスを予め知っておくことが、実施および結果解釈の一助となることが期待できる。したがって本研究では、

FIT 実施時に、FIT 作成者がどのような心理的プロセスをたどるのかについて明らかにすることを目的とする。

2 方法

対象：20～30代の男女20名

時期：2006年4月～6月(予備調査後に本調査実施)

用具：FIT(家族イメージ法)、デジタルビデオカメラ、筆記用具、ICレコーダー

調査手順：

はじめに FIT に記載してある内容をもとに作成に関する教示を行った上で、FIT を作成してもらった。その際、被調査者の許可を得て、その様子をデジタルビデオカメラで撮影した。その後、FIT 完成後に半構造化面接によるインタビュー調査を行った。インタビュー項目は、予備調査から得られた情報を基に、FIT 作成時の心理的プロセスについて、最低限の回答が得られる範囲で作成した。インタビュー項目は、以下の通りであった。

- ①完成した FIT を見てじっくりした感じや違和感などがあるか
- ②教示を受けてから取りかかるまでの思考内容
- ③FIT 作成中の思考内容
- ④[撮影した映像を被調査者とともに振り返り、作成の過程で悩んでいると思われるシーン、および被調査者が自発的に悩んでいると申告したシーンを取り上げて]FIT 作成中の思考内容
- ⑤FIT 作成および振り返りを終えての感想

なお、調査に要した時間は一人平均40分程度であった。

分析方法：

FIT 実施時の心理的プロセスを、教示後、作成中、作成後の3段階に分け、KJ法(川喜田、1967)を用いて分析を行った。インタビュー項目②から得られた語りを教示後、③、④から得られた語りを作成中、①、⑤から得られた語りを作成後の思考内容とし、筆者らでそれぞれの語りの単位化およびグループ化を行った。

3 結果

分析の結果見出されたグループを、横軸に作成時間(教示後、作成中、作成後)、縦軸に家族についての視点の広がりをもって図にまとめたものが図1である。

さらに、作成時間の3時点それぞれにおけるグループサイズを表したものが図2、3、4である。

教示後の心理的プロセスには、以下のような特徴が認められた。

- ・FIT の手続きに関する思考である〈手続き〉と家族に関する思考である他の3グループに大別される。
- ・家族を全体的に捉える、自分を中心に家族について思考する、といった特徴が見られる。このことは、教示を受けてから FIT を作成するまでの時点において、家族像を大まかに把握していることを示唆する。
- ・手続き以外の3グループは、実際に FIT を作成する前にすでに家族についての思考が始まっているということを示す。

作成中の心理的プロセスには、以下のような特徴が

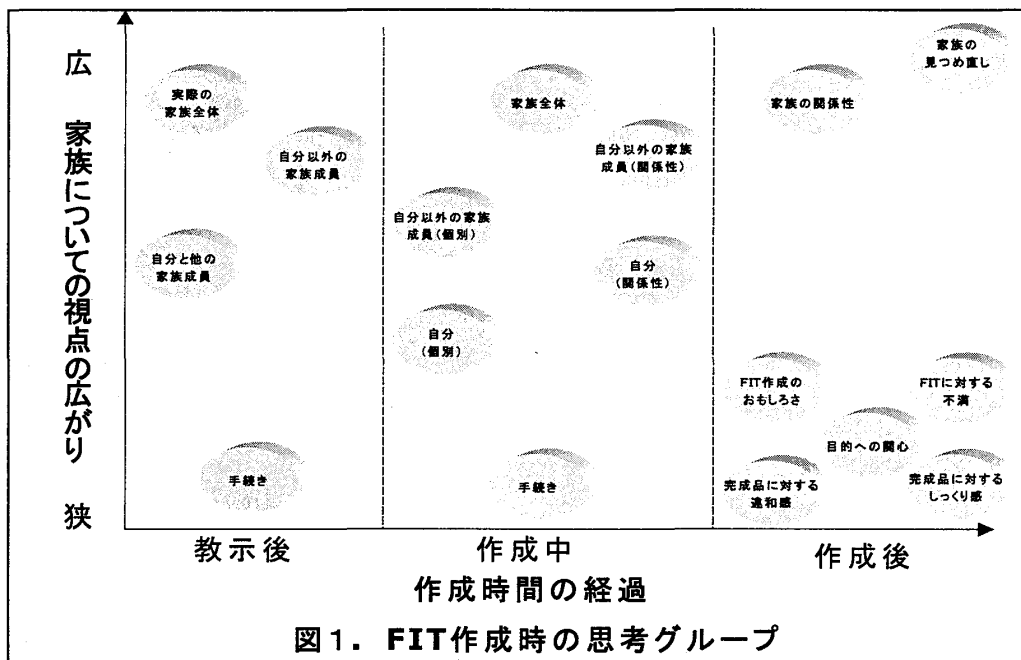
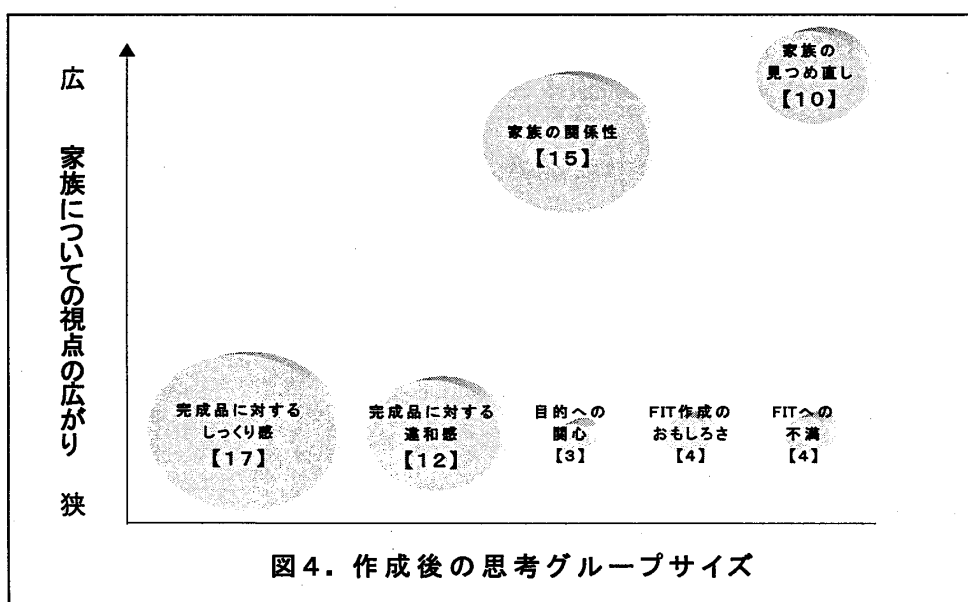
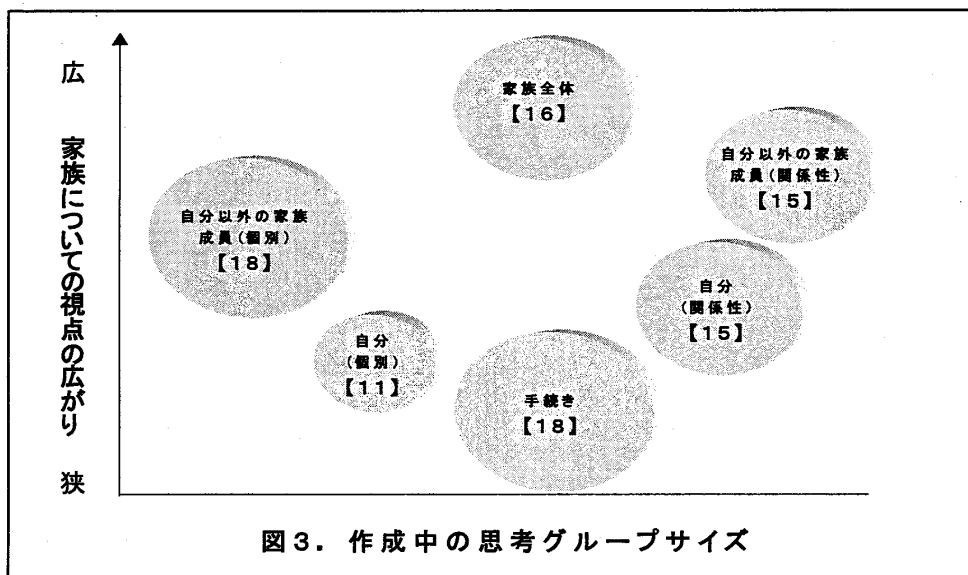
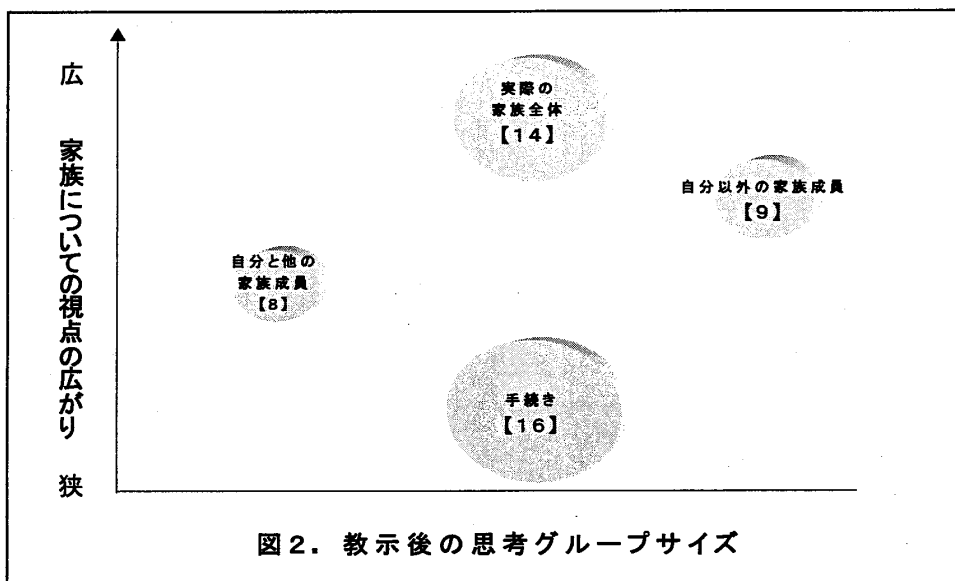


図1. FIT作成時の思考グループ



認められた。

- ・個々の家族成員に関する思考が見られる。
 - ・教示後のグループがさらに細かく分けられており、家族についての思考がより詳細になってきた様子が見える。
- 作成後の心理的プロセスには、以下のような特徴が認められた。
- ・全体的に教示後や作成中とは異質なグループと言える。
 - ・感想のような浅い思考と、家族についての再認識のような深い思考に二極化している。
 - ・作成者の多くが「しっくり」という言葉を用いた肯定的評価を下している。

4 考察

以下に、心理的プロセスと臨床的示唆についての考察を述べる。

心理的プロセス

グループの内容としては、家族イメージに関するものと、作成上の手続きに関するものに大きく二分することができた。まず、教示後と作成中において、ほぼ同様のグループが見出されたことは非常に興味深い。これらの結果から、教示後から作成中にかけては、一連の心理的プロセスとして捉えることができる。しかし、その中においても、教示後は家族を全体的に捉える、自分を中心に家族について思考するといった傾向がみられるのに対して、作成段階に入ると、個々の家族成員に関する思考がみられるようになるといった差異も見受けられる。このことから、FIT 作成時には、まず自分を中心とした大きな視点で家族を広く捉え、そこから各家族成員やその関係性へと狭く焦点化していくといった心理的プロセスが存在することが考えられる。いずれにせよ、教示後および作成中のグループからは、FIT 作成の手続きと実際の家族関係について考えをめぐらしている様子が見え、家族像の中に没頭する段階であると言える。

それに対し、作成後のグループは、教示後、作成中とは異なるものになっていた。〈完成品に対するしっくり感〉〈完成品に対する違和感〉の二つのグループは、①のインタビュー項目から必然的に生まれるものであるが、被調査者のほぼ全員が「しっくり」という言葉を用いて完成品に対する自分なりの肯定的評価を行っている点は、FIT の心理テストとしての妥当性に一定の評価を与えるものとも考えられる。また、〈家族の見つめ直し〉〈家族の関係性〉といったグループは、FIT

が持つ、「家族に対する気づきの促進」といった機能を表すものであり、このような機能は作成後の段階において生じていることがうかがえる。また、このことは、自分の中にある家族像を表現した家族図を見て、家族に対する新たな気づきが生じているということであり、その意味で作成後はメタ認知の段階であると言える。

したがって本研究から、①教示後から作成中にかけては FIT 作成のための手続きと実際の家族関係について思考をめぐらしながら FIT 作成に専念する心理的プロセス、②作成後は、完成品の評価・家族に対する新たな気づき・検査への関心といった心理的プロセスが見出されたと言える。

臨床的示唆

〈家族の見つめ直し〉から面接に新たな展開をもたらす可能性が、〈FIT 作成の面白さ〉から FIT 実施によって面接場面におけるリラックス効果が示唆された。

また、臨床場面において FIT を実施する場合、特に実施初心者は、作成者がどのような心理的プロセスをたどるのかということを考えて、出来上がったものだけを見てそれが作成者の家族を表していると判断してしまう危険も考えられる。しかし、本研究で明らかになったように、FIT の作成は「目の前の FIT 図」と「作成者がイメージする家族」との間を幾度も往復する過程である。そこにはさまざまな迷いが生じ、作成された図には作成者なりの妥協も含まれている。面接者がこのような了解をした上で FIT を活用することは、臨床場面における FIT の解釈において有用であると考えられる。

さらに、作成後において〈家族の見つめ直し〉というグループが見出されたということの意義は非常に大きいと言える。これは面接に新たな展開をもたらす可能性を大いに秘めたものであり、FIT を実施するタイミングを上手く見極めることができれば、FIT の持つ効果を最大限に引き出すことができると考えられる。

最後に、全ての時点から「関係性」というグループが見出されたことを強調しておきたい。このことは、FIT の実施によって、面接において「家族の関係性」への視点が大いに広がる可能性を示唆している。また、家族関係への思考が促進されるということは、心理臨床(特に家族心理臨床)において上手く利用することができれば、FIT が面接を動かす大きな原動力になり得るということを意味する。

今後は、本研究で得られた知見をもとに、質問紙を作成するなど、量的研究も視野に入れた上で、より豊かな心理的プロセスを綿密に検討していくことが重要

であると考えられる。

C 具体的事例から質的研究法開発へ

この研究を通して、質的研究にFITを用いることの長所がいくつか浮かび上がってきた。そしてもちろんそれと同時に、FITを用いた質的研究の現時点での限界もみえてきた。そこで次章では、従来の研究からの知見も踏まえた上で、この研究からみえてきたことを中心に、質的研究にFITを用いることの利点と今後の課題について論じる。それをベースとして、今後のこの分野における研究が大いに活性化し、発展していくことが期待される。

IV 質的研究にFITを用いることの利点と課題

A 質的研究にFITを用いることの利点

II章でみてきたように、質的研究における面接でのデータ収集では、非構成的な面接法が頻繁に用いられている(Swanson et al, 1992)ものの、特に研究の初心者にとって、非構成的な面接の中から豊かなデータを集めることは困難を伴う。したがって、捉えようとする現象を的確に捉え、かつ自然で豊かな語りを得られるようなデータ収集法の工夫が望まれる。II章においては、その一策として、質的研究にFITを用いることを提案した。以下の3点から、質的研究においてFITを用いることの利点を述べる。

1 面接者との視覚的対象の共有

家族関係を把握するためには、明確に言語化された家族関係だけではなく、非言語的、あるいはイメージ的な家族関係も重要(柴崎ら, 2001)とされている。これまでも述べてきたように、FITはそのためのツールの一つである。しかし、言語のみに頼るのではなく非言語的要素も用いて家族関係を把握しようとする手段は、FIT以外にもいくつか存在する。例えば、描画法を用いることでもイメージ的な家族関係を把握することが可能である。しかしながら描画法における描くという行為には、得手・不得手を評価される懸念から、作成者が抵抗感を持つ難点がある。一方、シールを貼るという方法をとるFITでは、このような抵抗感を持たれる心配が少ない。

また、家族ロールシャッハ法も視覚的要素を利用して家族関係の把握を試みるものである。家族ロールシャッハ法では、ロールシャッハ刺激を前にして家族成員が話し合いにより合意に達する過程を観察することで家

族内相互作用の状態を解明しようとする(岡堂, 1991)。確かに個人と集団の相互作用を同時に把握することが可能という点で家族ロールシャッハ法は有効であるが、観察しなければならない行動見本が非常に多い上、そのデータ分析は解釈者の主観と技能に左右されやすい(岡堂, 1991)ため、家族ロールシャッハ法の利用が初心者にとって容易とは言い難い。それに対して、III章で述べたように、FITを用いる際にはFIT完成図が面接者にとって面接ガイドの役割を果たし、FITを媒介にすることで面接がスムーズに展開していく。

このような特徴をもつFITを質的研究に用いた場合、作成者と面接者の間で家族イメージの視覚的対象の共有が可能になる。FITにより家族関係を外在化することで、作成者と面接者の間で共通理解のためのツールが一つ増えることになるのである。さらにFITが一定の信頼性および妥当性を持つ(柴崎ら, 2001)ことを考え合わせれば、FITの有効性は高いと言えるだろう。

2 促進される語り

III章において、FITを作成する際、作成者の思考は、家族全体から個別の家族成員や関係性、さらには家族の見つめ直しという過程をたどることが明らかにされた。また、全ての時点から「関係性」というグループが見出されている。したがって、FITの作業法的要素により家族に関する思考が多様な視点の広がりをもって詳細化し、その後の面接において家族の関係性への視点が大いに広がる可能性が示唆されたと言える。FITを実施することにより作成者の中で家族の関係性に関する思考が広がれば、面接者がたとえ初心者であっても必然的に詳細な語りを得やすくなる。

また、FITを作成することで自分の家族をさまざまなレベルで捉えられるようになる。加えて、個々の家族成員のシールを選び、更に家族成員同士の関係性を3種類の線で表すというFIT独特の手法により、作成者は各家族成員間の関係性を意識化し、関係性について検討しやすくなる。それにより、その過程で各成員間の様々なエピソードが想起されていくのである。想起されるエピソードが家族全体に関する漠然としたものにとどまらず、各サブシステムのレベルでも想起されるというFITのこの特性は大きな意味を持つ。

FITを作成することで、家族をさまざまなレベルで捉えるようになり、さらにFIT完成図を媒介にした面接者とのやり取りという、言葉と図との相乗効果から豊かな語りが促進される。

3 KJ法とFITの親和性

Ⅲ章の研究では、分析方法としてKJ法を用いた。KJ法とは、文化人類学者川喜田二郎が考案した質的データを創造的にまとめるための方法論である。KJ法は、データを先入観や期待、既存の仮説や理論にあてはめるのではなく、ボトムアップ式にデータそのものに語らせて、秩序を見出すのが最大の特色で、発想・創造の技法であるとされる(難波, 2005)。演繹法、帰納法、に並ぶ第三の推論形式アブダクションを認識論的基盤に据えて構築された理論であり、川喜田(1967)によれば、アブダクションとは、「アイデアをつくりだす発想法」で、「モヤモヤとした情報群の中から明確な概念をつかみ出してくる」ことであるとされる。

一方FITは、投映法の一つとして位置付けられたツールである(柴崎ら, 2001)。Frank, L. K.(1993)によれば、投映法とは、非構造的な刺激状況を被験者がどのような仕方で解釈し、意味を与え、体制づけていくかを知ることを通して、その被験者に固有の体験のありかたについて洞察を得る方法であるとされる。FITを作成する場合、作成中に家族に対してさまざまな思考をめぐらせる。また、作成後の語りの中では、完成した図を基に、作成者の主観的な家族イメージが語られる。この語りは、図を見ただけで周りが了解できるものではなく、まさに作成者の主観的なイメージからの語りである。この点においては、質的研究が「生きられた経験」および、人々がそれに付与している解釈と意味に焦点を当てる研究方法であることを考えれば、その有用性は高いと考えられる。

しかし、質的研究の実際の分析過程においては、「モヤモヤした情報群の中から明確な概念をつかみ出してくる」ことが求められており、説得力のある概念関係を示すことには困難がきまとう。KJ法では、収集された質的データを、「ラベル作り」→「グループ編成」→「図解化」→「叙述化」の4つのステップを順に踏んでまとめていくが、FITが持つさまざまな指標や機能を用いることで、これらのステップについてまとめやすくなることが期待できる。例えば、「グループ編成」や「図解化」のステップにおいては、FITが持つ、パワー、向き、結びつきといった指標を用いることによって、グループ化が容易になる。さらに、FIT作成が、自分、家族成員個別への思考から、家族全体への思考、家族全体への見つめ直しといった段階を踏むことを考えれば、KJ法における「叙述化」のステップにおいて、FITが持つ家族のライフストーリー生成の機能を有効に用いることが可能になると思われる。

このようにFITは、質的研究の中でもKJ法的に用いることで、分析過程においても有用なツールとなるものである。また、グラウンデッドセオリー法がKJ法と理論的、技法的に親和性が高いことを考えれば、グラウンデッドセオリー法を用いた分析においても、利用可能性が高いツールであると考えられる。

4 臨床実践と研究活動をつなぐ

現在FITは臨床心理士、家庭裁判所調査官・調停委員、児童相談所職員、福祉施設関係の相談員、医療・看護関係職員、スクールカウンセラー、産業カウンセラー、教育相談担当者、留学生支援団体の職員等、幅広い心理臨床や家族臨床にかかわる領域の専門家によって種々の活用法が開発され、用いられてきている(亀口, 2006)。

このように様々な領域で用いられているFITを利用した質的研究から得られた知見であれば、臨床家が現場で活用していける可能性が高い。例えばⅢ章の研究からは①面接に新たな展開をもたらす可能性、②面接場面でのリラックス効果、③作成過程を考慮したFIT活用の有効性、④FITを用いるタイミングの重要性といった知見が得られたが、このような知見はFITを臨床現場で活用していく際の手がかりとなる。

また、逆に、FITを利用した質的研究を行う際には現場でFITを用いている心理臨床家の意見も取り入れやすい。例えば、河東田(2004)はFIT使用経験者の意見として、FITを使用する上での課題、援助過程におけるFITの課題、ツールとしての課題等を挙げている。FITが実際に様々な領域の臨床現場で用いられているツールであるがゆえに、このような現場の声を組み込んだ研究を行うことができ、またその知見を現場に還元していくことが可能なのである。

このように、質的研究にFITを活用することで、FITを用いた研究と臨床がうまく循環し、双方の知見を最大限に活かしていくことができる。研究と臨床はともすれば乖離しがちであるが、FITは研究と臨床の橋渡しの役目を果たすと言える。

B 質的研究にFITを用いることの課題

この節では、質的研究にFITを用いていくために考慮すべき今後の課題について述べる。

1 FITを用いた質的研究の例について

まず、Ⅲ章で紹介した「FITを用いた質的研究の例」に関しては以下の課題が考えられる。今回は、FITを

用いた質的研究の具体例として、「FIT 作成時の心理的プロセス」に焦点を当てて研究を行った。この研究から、FIT 作成時には、個別の家族成員に関する思考から、家族の見つめ直しといった、より深い思考過程をたどることが明らかにされたが、対象を「思考プロセス」に絞ったために、作成者の語り、面接者の分析の視点が「思考」に限定されてしまった。質的研究を行うためには、リッチなデータを集めること(戈木, 2005)が必要だとされる。そのためには、「思考」に限定してしまうのではなく、FIT 作成時の「体験過程」や、「感情」にも焦点を当てることが必要となるであろう。また、家族研究においては、個人の家族に対する思いについてのデータを集めることが必要になることも考えられる。そのような場合に、今回の研究で用いられた手法を使用して「思考」や「感情」に加え、それぞれの心理的プロセスについての作成者間の違いにも目を向けることで、FIT という媒体を通して、作成者の家族に対する思いについての豊かなデータが得られることが期待できる。

2 方法の併用

ここでは、今後 FIT を用いた質的研究法をさらに発展させるための方法として、量的研究と質的研究の併用に FIT を用いていくことについて論じる。

心理学的研究においては、さまざまな情報を得るため、または異なった見地から特定の問題を照らしてみするため、あるいは、ある現象を異なった観点でみるために、研究者はそれぞれ独自の世界観から生じた2つの方法論(量的研究と質的研究)を用いることがあるとされる(Holloway et al, 2000)。また、Depoy と Gitlin (1993)は、方法の併用のための3つの基本的な技術として「入れ子式方略」「連続する方略」「平行した方略」を挙げているが、その中でも「連続した方略(sequential strategies)」の技術は、FIT を用いることによって、量的研究と質的研究の両面からアプローチすることが可能になるものだと考えられる。

つまり、「連続する方略」とは、①ある論点について探求しようとした最初の段階で、非構造化面接のような質的研究方法の技術を用い、これらの面接をもとに、大規模調査のための仮説を立てて質問紙を作成するといったもの、②事実を検証する量的アプローチを開始し、それから質的方法を加えて、それまでは探究されなかった感情や認識を探求するといったものなどである。

例えば、これまで家族関係を把握するためにしばし

ば用いられてきた Olson ら(Olson, et al., 1985)の円環モデルに基づいた自己報告式の質問紙である Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III (FACES III)では、家族全体についての量的データは得られるが、個々の家族成員間のつながりといった詳細な部分についてのデータを得ることはできなかった。これに対して FIT は、上述したように詳細で豊かな家族に関するデータを得られるため、FACES III の限界を補うことが可能になり、量的研究ではすくいきれなかった現象を見出すことが期待できる。

また、これまでの研究から示される通り、FIT は、量的研究と質的研究の両方において用いることが可能である(大熊・渡邊, 2004)。そのため、まずは量的な分析によって集団の全体的傾向を探り、その上で質的な分析を行うことで詳細なデータを得るといった、FIT 単体での「方法の併用」が行えると考えられる。

この2種のデータをそれぞれ別個に扱っていくことは初心者にとってもさほど難しいことではなく、これまでも多くの研究がなされている(例えば、大下ら, 1999; 森岡・張, 2005)。しかしながら、FIT 図から得られる量的データと、FIT を媒介にして得られる質的データとを組み合わせ、総合的に FIT を活用していくとなると、それは決して容易なことではない。この点に関しては研究者による試行錯誤が繰り返されているのが現状である。

量的データと質的データのいずれかのみには焦点を当てるのでは、FIT の一部を見ているにすぎない。したがって、初心者であっても FIT の可能性を最大限に活かしていけるように、この問題を克服するための更なる研究が必須である。このような「方法の併用」での使用に耐えるために、量的研究、質的研究の両方について、今後多くの知見を積み上げていく必要がある。

V おわりに

われわれは、FIT の質的研究法の新たなツールとしての潜在的な可能性に着目し、本論を共同執筆した。その過程を通して、FIT の有用性とその豊かな発展の可能性がいくつも見出された。再確認できたのは、FIT の最大の特徴が、作成者自身の内的イメージを次元の異なる複数のスケーリングの組み合わせによって、視覚的にも言語的にも外在化させる点にあることであった。作成者による内的な視覚的構成の過程は、実施者による半構造化面接によってさらに豊かな「語り」へと転換し、言語的構成の過程を導き出すことを容易にす

る。つまり、実施者と作成者の双方が、FIT 完成図として可視化された視覚的データとともに、言語的データをも同時に入手できるのである。

この FIT を媒体として用いる面接法は、量的および質的研究法の双方の特性を兼ね備えた、いわば「ハイブリッド型」の第 3 の研究法といえるのではないだろうか。とりわけ、臨床心理学や家族心理学、発達心理学、社会心理学等の研究領域では、有効に用いられる可能性が高い。しかし、この試みはまだ開始されたばかりであり、今後多くの研究者・実践家の協力を得ることが必須の要件となっている。

引用文献

- 秋丸貴子・亀口憲治 1988 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究, 15(2), 61-74
- Depoy, E. & Gitlin, L. N. 1993 *Qualitative Data Analysis: A User-Friendly Guide for Social Scientists* Routledge, London.
- Frank, L. K. 1993 Projective Methods for the study of personality. *Journal of Psychology*, 2, 389-413
- Heshusius, L. 1986 Paradigm Shifts and Special Education: A response to Ulman and Rosenberg. *Exceptional Children*, 53, 461-465.
- Holloway & Wheeler(著) 野口美和子(監訳) 2000 ナースのための質的研究入門 医学書院
- 亀口憲治 2000 家族臨床心理学—子どもの問題を家族で解決する 東京大学出版会
- 亀口憲治(監) 2003 FIT(家族イメージ法)マニュアル システムパブリカ
- 亀口憲治 2006 心理査定実践ハンドブック 氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子(編) 創元社 785-787
- 柏木恵子 2003 家族心理学 社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会
- 片平眞理 2005 大学生の家族イメージ 志学館大学人間関係学部研究紀要, 26(1), 17-26
- 河東田誠子 2004 FIT(家族イメージ法)についてのアンケート NPO 法人システム心理研究所
- 河東田誠子 2005 オランダにおける知的障害者の家族イメージ 日本家族心理学会第22回大会発表論文集
- 川喜田二郎 1967 発想法—創造性開発のために— 中央公論社
- Kveback, D. 1980 *The Kveback Family Sculpture Technique*. Jonesboro: Pilgrimage.
- May K. A. 1991 Interview techniques in qualitative research. In *Qualitative Nursing Research: A Contemporary Dialogue*(ed. JM. Morse), pp.188-209, Saga, Newbury Park, California
- 前出朋美・島谷まき子 2004 家族イメージ法の分析指標の検討—肯定的家族観・父子関係・母子関係・両親関係との関連— 学苑・人間社会学部紀要, 761, 40-47
- 森岡さやか・小菅律・張磊・中川真美・亀口憲治 2006 家族イメージ法(FIT)の現状と今後の展望 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 29, 221-236
- 森岡さやか・張磊 2005 FITを用いた青年の家族イメージとその語り 第13回システム心理研究会
- 村本由紀子 2006 心理学研究法の新しいかたち 吉田寿夫(編著) 誠信書房 221-235
- 中坪太一郎・新谷侑希・坂口健太・塩見亜沙香 2006 日本家族心理学会 第23回抄録集
- 中島義明他(編) 1997 心理学時点 有斐閣
- 難波純子 2005 動きながら織る, 関わりながら考える 伊藤哲司・能智正博・田中共子(編) ナカニシヤ出版 125-131
- 能智正博 2000 質的(定性的)研究法 下山晴彦(編) シリーズ・心理学の技法 臨床心理学研究の技法 福村出版
- 能智正博 2005 動きながら織る, 関わりながら考える 伊藤哲司・能智正博・田中共子(編) ナカニシヤ出版 21-31
- 岡堂哲雄 1991 家族心理学講義 金子書房
- 大熊保彦・渡邊愛 2004 家族イメージ法(FIT)分析法の試み 日本家族心理学会 第21回抄録集
- 大西晶子 2003 児童期・思春期の心理的問題 下山晴彦(編) やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかる臨床心理学 ミネルヴァ書房
- 大下由美・亀口憲治 1998 ウィグルの子ども達の家族イメージ 福岡教育大学紀要, 47(4), 151-161
- 大下由美・亀口憲治 1999 中学2年生の家族イメージの研究—父・母・子の3者関係イメージ— 家族心理学研究, 13(1), 1-13
- Olson, D. H., McCabbin, H. I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. 1985 *Family Inventories*. St. paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H., and Russell, C. S. 1979 「Circumplex Model of Marital nad Family Systems I: Cohesion and Clinical Application.」*Family Process*, 18, 3-28
- 呉宜児 2005 動きながら織る, 関わりながら考える 伊藤哲司・能智正博・田中共子(編) ナカニシヤ出版 77-91
- 戈木クレイグヒル滋子 2005 質的研究方法を学ぶ—グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ—
- 佐治守夫(監) 1995 思春期の心理臨床 日本評論社
- 相模健人 1997 青年期における現在および未来の家族イメージに関する研究—動的家族画・家族イメージとSD法を使って— 家族心理学研究, 11(1), 27-41
- 芹沢俊介 2004 家族という暴力 春秋社
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 2001 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析 家族心理学研究, 15(2), 141-148
- 下山晴彦 2002 心理学の新しいかたちを探る 下山晴彦・子安増生(編著)心理学の新しいかたち—方法への意識 誠信書房 1-37
- 新藤克己・相模健人・田中雄二 2002 小学生の「家族イメージ」に関する研究 家族心理学研究, 16(2), 67-80
- Strauss A. & Corbin J. 1990 *Basis of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*. Sage, Newbury

Park, California

Swanson & Chenitz(編) 1992 樋口康子・稲岡文昭(監訳) グラ
ウンデッドセオリー 医学書院

田中新正・白正喜 2003 韓国人留学生と日本人大学生の両親への
心理的距離の比較研究—「家族イメージ法」による— 大分大学
教育福祉科学部研究紀要, 25(2), 215-223

Willig(著) 2001 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至(共訳) 心理学
のための質的研究法入門 培風館

付記 本論文の作成にあたっては、平成16～18年度科学研究補助金
(基盤研究A)による助成を受けた(研究代表者亀口憲治, 課題番号:
16203036)。